



[図書館談話室] 西洋社会科学古典資料講習会報告

著者	中村 幸弘
雑誌名	関西大学図書館フォーラム = Kansai University Library forum
巻	10
ページ	77-79
発行年	2005-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10112/00022039

西洋社会科学古典資料講習会報告

中村幸弘

されつつある。

はじめに

第24回西洋社会科学古典資料講習会（平成16年11月9日～11月12日）に参加した。この講習会は、一橋大学社会科学古典資料センターが主催となり、国公私立大学図書館及び大学その他の研究機関に所属する者で、西洋社会科学古典資料の整理又は調査研究に従事している者を対象に、西洋社会科学古典資料の収集・蓄積に関する高度な知識を得るために同センターが毎年開催しているものである。今回の受講対象者は31名であり、講習のプログラムは2ページ目の表のとおりである。

さて、今回の研修は、①書誌学、②貴重書のデジタル化、③資料の保存・修復、④古典研究、⑤古典センターの書庫・保存工房などの施設見学及び展示された収蔵貴重書の紹介、など非常に多彩な内容であったが、以下では主に業務との関係から貴重書のデジタル化と資料の保存・修復を中心に述べさせていきたいと思う。

一橋大学社会科学古典資料センターとは

大学が蓄積してきた貴重な社会科学の古典を集中管理し、社会科学研究者のより高度な研究に資するために、1978年に附属図書館から分離され、独立の機構と目的を持つ貴重書図書館として設立された。現在の蔵書数は約7万冊で、この中にはカール・メンガー、オットー・ギールケ、左右田喜一郎の三教授の旧蔵書、フランクリン文庫、ベルシュタイン＝スヴァーリン文庫という世界的に著名かつ重要なコレクション他、1850年以前の欧語刊行物の多くを収蔵している。これらは、マイクロフィルムで収蔵されているゴールドスミス＝クレス文庫とともに、社会科学古典文献の世界的に貴重な巨大宝庫を形成している。また、センター所蔵資料の書誌・所蔵情報は、一橋大学附属図書館オンライン目録（HERMES）及び国立情報学研究所総合目録データベースに入力

古典資料展示の中から

今回の講習会では具体的な古典資料についても見識を深めるため、①カントやフィヒテなどの講義関連資料、②ホッブズやロックなどの社会思想の古典、③アダム・スミス『国富論』初版、マルサス『人口論』初版、などの経済学史の古典、④カール・メンガー文庫からアリストテレス『政治学』テキスト・ラテン語訳他合計29点の古典資料を説明付で見せていただいた。

その中で特に印象に残った一点だけを紹介するとすれば、やはりホッブズの『リヴァイアサン』であろう。この資料は書誌学のテキストにもよく出てくる資料で洋書を担当されている方であれば、知っている方も多いかもしれないが、「万人の万人に対する闘争」という有名なフレーズが見られる、イギリスの哲学者・政治思想家トーマス・ホッブズの主著である。そもそもリヴァイアサンとは、『旧約聖書』「ヨブ記」に現れる巨大な怪獣のことであり、ホッブズは絶対的支配権をもつ国家をそれにたとえた。人間は平和を作り出すために、契約を結び絶対君主の支配する国家に自然権を譲渡すべきだという社会契約説が主張された。ホッブズは1660年代に宗教界から激しい攻撃を受け、本書の復刻も禁止されたので、秘密出版のためか1651年にロンドンで出版された本書Leviathan英語版初版とされるものに3種類あることはよく知られている。

古典資料センターでは、その全てを所蔵しており、タイトルページを詳細に見てみると、おもしろいことにいくつかの相違を確認できる。ひとつは、タイトルページの飾り模様から、通称「ヘッド（首）」と呼ばれる真正版、2番目は通称「ベア（熊）」と呼ばれる偽版の1つ。これは一説にはオランダで出版されたとも言われているが、本来「Crooke」とあるべき出版者名が「Ckooke」となっている。3番目はもう一方の偽版で、1680年頃に出版されたとい

われている「オーナメンツ (装飾品)」と呼ばれるもので、タイトル表記の「OR」のあとに「,」があり、また、「Forme, & Power」が「Form, and Power」となっている。なお、「ベア」を第2版、「オーナメンツ」を第3版と呼ぶ場合もある。つまり、①飾り(オーナメント)が異なること、②標題紙に印刷されているタイトルや出版事項にスペルの違いがあることなどが、識別の手がかりになっている。私はこれらの相違を現物を比較しながら、興味を持って確認してみた。ちなみに同書は本学の図書館でも所蔵されている資料であり、研修後すぐに現物を確認してみたが上記真正版であった。

「貴重書のデジタル化—HUMIプロジェクトの現状と今後の展開—」について

慶応義塾大学HUMI (Humanities Media Interface) プロジェクトは、1996年に慶応大学がゲーテンベルグ聖書を収蔵したのを契機に、学部横断型の産学連携コンソーシアムとして創設された。以来、貴重書のデジタルアーカイブに関する研究とデジタル化の実践、高詳細デジタル画像を用いた書物学研究の拠点として活動している。貴重書のデジタル化のための撮影手法や特殊装置の開発を進め、大英図書館を初めとする海外の研究図書館の貴重書デジタルアーカイブ・プロジェクトにも協力してきた。

2001年4月からは、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業において、ゲーテンベルグ聖書・イギリス初期印刷本・奈良絵本をそれぞれデジタル化の対象とする三つの研究プロジェクトを担当している。これまでのデジタル化の成果としては、

ゲーテンベルグ聖書7セット、12世紀ロマネスク写本のベリー聖書、キャクストン版『カンタベリー物語』初版と第2版、慶応義塾図書館、BL、チェスター・ビーティ図書館などの奈良絵本、トマス・マロリー著『アーサー王の死』のウィンチェスター写本その他、慶応義塾図書館所蔵の博物誌や時祷書などがある。HUMIにおけるデジタル化の特徴としては、①資料の選定・調査から撮影、画像処理、デジタル・ファクシミリ制作、インターネットやCD-ROMによる公開や、書誌学を初めとする人文科学分野の研究での活用に至るまで、全てのプロセスを研究の対象として進めていること、②デジタル化の入口となる撮影の作業を業者に外部委託することなく、研究課題に取り組む者自らが独自の手法によって、本に負担をかけずに安全で高精度な撮影を行う技術の開発を行い、外部機関への技術供与を行っている、点である。

プロジェクトではこれまでに蓄積した稀覯書のデジタル画像を用いて、画像上の活字の自動認識と書誌学的分析を可能とするシステムの開発を目指すなど「デジタル書誌学」の確立へ向けて積極的な活動を展開している。また、デジタル画像を中心にウェブによる情報発信にも力を入れており、ゲーテンベルグ生誕600年を祝った2000年11月、BLのウェブサイトに掲載されたHUMIプロジェクトによるゲーテンベルグ聖書2セット、全2600ページに及ぶデジタル画像は、6ヶ月で百万件ものアクセスを記録した。また、最近の国際学会での発表や外国での国際会議の主宰といった国際的な展開によってもHUMIの認知度は上がってきている。

本学の図書館でも電子展示委員会を中心に、平成

第24回 西洋社会科学古典資料講習会 時間割

		第1時限 (9:40-11:30)	第2時限 (13:00-14:50)	第3時限 (15:10-17:00)
11月9日 (火)	オリエンテーション (9:10~9:30)	書誌学(I) 「図書館員のための書誌学入門 —記述書誌の読み方を中心に—」 武者小路信和 (大東文化大学文学部助教授)	書誌学(I) 「図書館員のための書誌学入門 —記述書誌の読み方を中心に—」 武者小路信和 (大東文化大学文学部助教授)	保存・修復(I) 「紙資料の保存」 増田勝彦 (昭和女子大学大学院生活 機構研究科教授)
11月10日 (水)	附属図書館 見学 (9:00~9:30) 希望者のみ	古典研究(I) 「クワイの経済学」 只腰義和 (横浜市立大学商学部教授)	保存・修復(II) 「本の保存作業—製本精選と調査 票による記録化—」 岡本幸治 (製本家・書籍修復家)	社会科学古典資料センター見学 書庫・所蔵資料・貴重書保存 修復工房
11月11日 (木)		書誌学(II) 「貴重書デジタル化—HUMIプロ ジェクトの現状と今後の展開—」 高宮利行 (慶応義塾大学文学部助教授)	古典研究(II) 「カンチからヘーゲルへ—個人・市 民社会・国家—」 高柳良治 (国学院大学経済学部教授)	書誌学(III) 「書物の綴じ・前後・上下問題に関 する一考察—私的蔵書空間にお ける本の配置をめぐって—」 高橋達史 (青山学院大学文学部助教授)
11月12日 (金)		書誌学(IV) 「18世紀フランス出版事情」 長谷川舞夫 (上智大学文学部助教授)	古典研究(III) 「18世紀フランスにおける書物と世 論—出版物・増・裁判—」 森村敏己 (一橋大学大学院社会学 研究科助教授)	修了式 (15:00~15:30)

15年度に上方の浮世絵師「長谷川貞信」の作品、平成16年度には「伊勢物語」といったように、資料のデジタル化・Web上での公開を積極的に進めつつあり、特に長谷川貞信浮世絵資料については、2005年1月にプレスリリースを行った。一橋大での取り組みで参考にすべきは、組織、手法及び技術面はもちろんのこと同プロジェクトが基本姿勢として常に「誰のために、何を、いかにデジタル化するか」を念頭に活動が続けていることである。相応の予算を組みせつかく資料のデジタル化を行いWeb上での公開を行うからには、基本姿勢としてはっきりとした目的意識をもつことが重要である。

当館の電子展示室においても、現時点では当フォーラム第9号(2004)でも触れられているとおり、所蔵資料を学内外に紹介し図書館のPRを主目的としているため、今のところはJpeg画像の配信のみを行っているが、将来的にはJpeg画像より高品質な画像であるTiff画像の提供による研究目的での利用の可能性を検討する必要がある。

なお、かねてより本学図書館では、コレクションや貴重書等の中からテーマを決めて、図書館の展示室において毎年2回展示・公開しているが、平成17年度における電子展示事業は、新しい試みとして通常の展示とタイアップを図っていく予定である。

資料の保存と修復

紙資料の保存と修復については、様々な観点から考察があったが、留意しておきたいのは例えば、図書館で一般的に使用されている修復用テープは、変色の可能性があるため開架図書などの消耗図書の修復にはいいが、資産図書などの重要な図書には使ってはいけないことである。資産図書には、専門店の修復用の和紙と伝統的なでんぷんのりを使って修復することが大切である。ほこりがたまった所はカビが生えやすく虫が来やすいため、原始的な方法ではあるが、ほこりを取り除くことが効果的である。また、貴重書資料の大敵である虫害対策としては、酸化エチレンなどの毒ガスよりも、釣具店で販売しているような簡便式の冷凍庫を使った低温殺虫のほうが、メンテナンス不用で維持管理費が安い点で有利である。

西洋古典資料センターでは、①古典資料の保存に際してダスペットというほこりを吸収する機械を使って本の清掃をする、②本に挟む請求記号・バーコ

ードがある用紙に中性紙を使用する、③古典資料の展示の際に資料の痛みを和らげるために中性紙使用による手作りの書見台を使用する、④国立大学で唯一という修復工房を所有し、熟練の担当者が資料の修復や革装本の手入れを行うとともに、保存箱、封筒フォルダー(主に別刷り資料の保存用)及びジャケットを作成して保存するなど、古典資料の保存、管理が徹底している点に感心させられ、本学の図書館においても見習うべき点は多いと痛感した。

所感

私の場合、現在古典資料を含めた洋書の購入、発注業務を担当しており、当研修が実務に直結する内容を多く含んでいるため参加を希望し、今回は幸運にも参加することができた。研修では書誌学の基礎や古典研究、資料の修復他今後実際の業務に活用できそうな貴重な知識を得ることができ大変有意義であった。

慶応大のHUMIの取り組みでは、国際的な展開によりある意味世界レベルでの貢献をしてくれていると言える。本学の図書館でも将来的には、古典籍の資料等を前述したとおり、部分的な形であっても資料紹介や広報と平行して、研究にも利用可能な形で広く情報発信し、情報センターとして学内の研究者のみならず幅広く活用していただき、そのことにより何らかの社会貢献をしていくべきではないかと考えている。このことを意識して活動していくことは図書館自身の社会的な存在意義を高め、相応の予算を投入して購入した貴重な資料群を生かし、最大限のコストパフォーマンスを発揮させる一つの道であると考えられないだろうか。

貴重書等の修復、保管について言えば、個々の資料に応じた適切な処置を施さないといけないが、修復するにしても、酸性物質の使用など一歩間違えば資料の価値を落としてしまうことにもなりかねず慎重な取り扱いが必要である。

今回の研修では、講師をはじめ北は札幌より南は福岡まで全国の他大学からの参加者と知り合いになることができ、積極的に交流、情報交換を行った。今後はそういった外部の人々との人的なネットワークについても大切に、見識を高めるとともに、今後も専門知識の吸収を積極的に行い研鑽に努めていきたいと思う。

(なかむら ゆきひろ 学術資料課)